

骨の子

真っ黒い地平線に骨の子はいた。

骨の子の仕事は骨を削ることである。

だから、今日もがりがりと削る。

真っ黒い地平線の地面は白く、空は紫だった。

削るのは、自分の骨である。

だから、骨の子の骨はどこかしこも細くなっている。

真っ黒い地平線の白い地面には、たくさんの骨が転がっている。

全部削ってしまうと骨の子はバラバラになって、地面に転がる骨になる。

地面に転がってしまったては仕事が出来なくなるから、

骨の子はバラバラにならないようにうまいことバランスを取って骨を削る。

真っ黒い地平線の紫の空はいつも淀んでいる。

今日は右の肩。明日は左の肩。

右の脛、左の脛。

三番目のあばら骨。五番目のあばら骨。

そういう、具合だ。

仕事には、一本のナイフを使う。

けれど、骨を削っているうちにナイフの刃はボロボロになってしまうから、

削り出した『骨の粉』を売って、

新しいナイフを手に入れる。

そして、

また骨を削る。

骨を削って、『骨の粉』を売って、新しいナイフを買って、

また削る。

骨の粉を買い取る場所は、真っ黒い地平線の端にある、真っ白い建物だ。

建物の前にはいつも大勢の骨が集まっていて、

手に手に削り出した自分の骨の粉を持っている。

売った骨の粉が、
どうなるのか、

骨の子は知らない。考えたこともない。

建物の中がどうなっているのか、どの骨も知らない。

ただ、

建物の外壁に穴がいくつか開いていて、そこに骨の粉を入れる。

そうすると、横の穴から少量の小銭が出てくる。

そうして、その横の穴に小銭を入れると、

その横の穴から、

ナイフが出てくる。

これを、

売る、

買う、

と、いう。

考える脳みそがない。

骨の子には骨しかないから、

物を考える、

ということが出来なかった。

何が稼いで、

何を売って、

何を買って、

何でナイフが出て来て、

何がどうなっているのか、

そういうことを考えることが出来ないのだ。

だから、骨の子はただ黙々と、骨を削り続けていた。

ある日、一輪の竜胆が、骨の子の脳無しの頭にやってきた。

「こいつはいいや」

と、竜胆は骨の子の頭の中でくつろぎ始めた。

竜胆は骨の子の中で好きなように過ごし、
住み着いてしまった。

骨の子は竜胆を気に留めなかったし、何も言わなかった。

そもそも、

骨の子には何かを気にするような神経もなかったし、
何かを声にする咽も持たなかった。

竜胆は、

悠々自適に、

ひどく快適に、

とても優雅に、

骨の子の頭の中で過ごした。

洒落たロッキングチェアに腰かけて、

ゆらゆら揺れながら、

年代物のウイスキーを嗜むのが竜胆の気に入った過ごし方だった。

ロッキングチェア、

が揺れるたび、

骨の子の頭が大きく揺れて、手元が狂う。

狂った手元のせいで、うまく仕事が出来なくなった。

同じところを丁寧に削ろうとしても、

削り過ぎてしまったり、空振りしたり、

ひどい時には勢い余って骨を折ってしまった。

バランスの良かった骨の子の細い体は、あちらこちらで太さの違う、不格好になってしまった。

左側のあばら骨を二本、

左手の薬指と小指、

右手の人差し指、

骨盤の左側、

鎖骨の右側、

を失った。

「やめっちゃまえよ、そんなこと」

酒臭い息で竜胆は骨の子に言う。

右の眼窩から美しい花を出し、花弁の間にかぶがぶとウイスキーを流し込む。

盛大なゲップと共に花粉をまき散らして、くたを巻く。

「そんなの仕事とは言わねえ、良いか？ 仕事ってのはな——」

と、酔っぱらった竜胆は空と同じに、淀んだ紫色の花弁をあちらこちらに揺らしながら、骨の子の頭の中でしゃべり続ける。

その度に骨の子はぐらりぐらりと揺れ、また、骨を失う。

「おめえよ、物を考えることはないのか？」

竜胆が、真っ黒い地平線の真っ白い地面を眺めながらそう、尋ねた。

骨の子は答えずに骨を削っていた。

「自分のやってることが何なのかわかってんのか？」

骨の子は答えずに骨を削っていた。

「んなこと続けられると、俺の住むところが無くなっちゃうじゃねえか」

骨の子は答えずに骨を削っていた。

「やめっちゃまえよ、そんなこと」

骨の子は答えずに骨を削っていた。

「お前も、そのうち、転がっちゃまうぞ？」

竜胆は、

何も言わない骨の子に、

イライラとして、

むかむかとして、

けれど、酔っぱらっているときのように何かを口にすることなく、ただ黙って、骨の子の、指の欠けた手を見つめていた。

青い花弁で、見つめていた。

ある日、骨の子は異変に気が付く。

何かがおかしい。

と、思ったわけではない。

――相変わらず、真っ黒い地平線だ。

いつものように体が動かない。

――地面は白く、そこかしこで骨が骨を削ってる。

――時折、どこかでからからかりと、

骨の崩れる音がする。

ぎくしゃくする。

動きづらい。

――空の紫がいくらか澄んでいるような気がする。

――紫の空。

白い地面と黒い線、

からりと転がる乾いた音と、

がりがりがりりと、自分の骨を削って落とし、

ひたすら粉を積もらせる、

音、がする。

腕全体がまったく動かない。

「これでどうだ？」

竜胆がしたり顔で言ってきた。

「これで仕事はもう出来ねえだろう？」

骨の子の両腕に、竜胆の根が巻き付いていた。

根だけでなく、蔓までも巻き付き、骨の子の動きをがっちり封じていた。

骨の子はどうか動こうとするが、そうするたびに、竜胆がぎゅうぎゅうと力を込めて締め上げる。

「無駄なことはよすんだな、お前の細い骨だけの体じゃ、どうにもなんねえよ」

そう言われても、骨の子は竜胆を振りほどくのを止めようとしない。

骨の子はもがく。

竜胆は締め上げる。

骨の子はもがく、

竜胆は締め上げる。

骨の子は――

ぱきりと、乾いた音がして、

骨の子の両腕が、肩から落ちる。

「ああ、ああ、言わんこっちゃない」

突然のことにバランスを崩し、

骨の子は倒れる。

倒れる拍子に、あばら骨が数本折れた。

そして、背骨の曲線が歪んでたわみ、中ほどから断ち切れる。

上半分と下半分に千切れて、骨の子は地面に落ちた。

竜胆は咄嗟に自分の体をまとめて住処を包んで守った。

からり、

と、驚くほどささやかな音を立てて、

骨の子はバラバラになってしまった。

「ああ、ああ、ひでえもんだ」

竜胆はまるで他人事のように、言った。

骨の子の頭は竜胆の根や蔓のおかげで綺麗なまま、傷ひとつない。

骨の子は、バラバラになって散らばる自分の体を見た。

どの骨も、細く、弱く、簡単に折れてしまいそうだった。

実際、ひどく簡単に、折れてしまって、

折れてしまって、もう、仕事は出来ないだろう。

空が遠くて、地面が近かった。

骨の子の頭は、他の骨と同じように、転がっていた。

転がるしかなかった。

もう、何にもできないのだ。

何にもできず、白い地面の一部になる。

骨の子は、頭を動かした。

もう、この白い頭しかなかったから、

カタカタと動かした。

仕事をしないといけない。

けれど、バラバラになった体は動かない。

カタカタと、

揺らす。

カタカタと、

揺らす。

不意に、

骨の子は、思った。

なぜ？

なぜ、そうしなければならないのだろう？

なぜ？

どうして？

そうしなければならないのだろうか？

どうして？

「なんで、そんなことをやらなきゃあならないのだろう」

竜胆が言った。

骨の子の思いを言葉にした。

それとも、竜胆の言葉を骨の子は思ったのだろうか？

しゅるしゅると、蔦が回る。

しゅるしゅると、根が回る。

ロッキングチェアが頭蓋の外に放り出される。

ウイスキーがまき散らされる。

骨の子の空っぽの頭蓋の中で、竜胆が自分の体を回していた。

「なんで」

——どうして、

「そんなことを」

——やらなければ

「ならないのだろう？」

竜胆は思った。

骨の子は思った。

ぐるぐると、竜胆が回る。

カタカタと、骨の子は揺れる。

「バカバカしいと、思わねえか？」

——わからない。

「言葉が通じて嬉しいよ」

——わからない。

「しよがねえから脳みそやってやるよ」

——わからない。

「宿代だ」

——わからない

竜胆は自らの体を伸ばし、

散らばった骨を集め、

ところどころを根と蔓で繋いで、

骨の子の体を作った。

空っぽだった骨の子の頭の中には竜胆がいっぱいに詰まっていた。

骨の子の骨しかなかった体には竜胆がいっぱいに詰まっていた。

竜胆の脳みそがあった。

竜胆の咽があった。

竜胆の神経があった。

竜胆の心臓があった。

竜胆の皮膚があった。

竜胆があった。

骨の子は立ち上がった。

竜胆は骨の子の右の眼窩から顔を出し、骨の子の眼になった。

骨の子は周りを見回した。

そこいらじゅうに花が咲いていた。

転がる骨に宿った花が、咲いていた。

紫の空は、夕焼けと、舞い散る竜胆の花びらだった。

「悪くねえだろう？」

竜胆は骨の子にウイスキーを差し出してそう聞いた。

骨の子は、

なんといいたらいいのかわからなかった。

だから、そのまま口にした。

咽が、あった。

——わからない

竜胆が、花を揺らした。